

漢法苞徳塾資料	No. 147
区分	治療論・治則
タイトル	鍼灸治療の四大原則
著者	八木素萌
作成日	1991.12 1992・7・25 補

◎鍼灸治療の四大原則

『靈枢』九鍼十二原第1の「…凡用鍼者 虚則実之 満則泄之 宛陳則除之 邪勝則虚之…」
 (…凡ソ鍼ヲ用イル者ハ虚スルトキハ之レヲ実ツセシメ満ナレバ之レヲ泄ツセシメ宛陳ナレバ之レヲ除キ邪勝ツトキハ之レヲ虚セシム…) は鍼灸治療の四大原則と言われる。

これを『靈枢』小鍼解第3は具体的に説明して「…迎而奪之者 瀉也 追而濟之者 補也 所謂虚則実之者 氣口虚而当補之也 満則泄之者 氣口盛而当瀉之也 宛陳則除之者 去血脈也 邪勝則虚之者 言諸經有盛者皆瀉其邪也…」(…迎エテ之レヲ奪ウトハ瀉ナリ、追ヒテ之レヲ濟スクトハ補ナリ、イワユル虚スレバ之レヲ実ツセシムトハ氣口虚ニシテ之レヲ補スベキナリ、満ナレバ之レヲ泄ツセシムトハ氣口盛ニシテ之レヲ瀉スベキナリ、宛陳ナレバ之レヲ除クトハ其ノ血脈ヲ去ラシムルナリ、邪勝ツトキハ之レヲ虚セシムトハ諸經ノ盛ノ有ル者ハ皆ソノ邪ヲ瀉スヲ言ウナリ…) と述べている。

つまり

- [1] 虚している場合は補法を施す、これは「追う」で経気を助けるものとされている。
 正気が不足しているものが虚であるが、経気の流注を助けるのである。後代には経气流注の方向に刺鍼するとか、その他の種々の解釈が出ているし相応の方法が提起されている。
 『難経』は、「体表・四肢・背部・浅表」の気（つまり陽気である）を鍼先に聚めて陰部にそれを送り込むように操作することこそ「補」である、との立場を主張している。
- [2] 「邪気実」を実と言う、これが『内经』の言う実である。これは瀉法によって体外に出すのであるが、迎えて気（註……経脈の気＝経気）を奪うようにするのが瀉法であるとされているが、後代には経の流注の方向に逆らうように、刺鍼するのだと言う解釈や、その他の解釈と相応の方法が提起されている。
 『難経』は、体の陰性の部位（体内部・躯間部・腹部・深部）つまり鍼を陰気がある部分に進めて、鍼先に陰気を聚めて体外に引き出し、そして、その陰気を捨てるように鍼を操作することが「瀉」である。こういう事を主張している。
- [3] 「満ナルモノ」は「泄」らしてやる、と言うのは「泄法」と呼ぶが、「気口満」の場合と言うのが「泄法」を施術する条件になっているのが『靈枢』小鍼解第3の説明である。「満」のことを「脹」のことと言う解釈も見られるので、解釈の適否の問題があるが、それを棚上げしても『脹論第35』に「脈之応于寸口・如何而脹・歧伯曰・其脈大

堅以濇者・脹也…」(訓みと註は下欄)とあり「…黄帝問于歧伯曰・脹論言無問虛実・工在疾瀉…今有其三而不下者・其過焉在・歧伯対曰・此言陷于肉盲・而中気穴者也・不中気穴・則気内閉・鍼不陷盲・則気不行・上越中肉・則衛気相乱・陰陽相逐・其于脹也・当瀉不瀉・気故不下・三而不下・必更其道・気下乃止・不下復始・可以万全…」(訓みと註は下欄)と言い、また『靈枢』水脹第57に「黄帝曰・膚脹鼓脹可刺邪・歧伯曰・先瀉其脹之血絡・後調其経・刺去其血絡也」と有る、脹の問題は別に詳しく検討すべきである。

「気口満」は脈拍が「満」つまり充満しているのであるから、浮・洪・緊張の状態の脈象と解すれば「熱」の在る病症に他ならない。「熱」を「泄」する刺法は既に確立されている。

- 〔4〕「宛陳ナレバ之レヲ除クトハ其ノ血脈ヲ去ラシムルナリ」とは今日言うところの「細絡」「浮絡」を刺して、そこに在る悪血・瘀血(停滞留結している死血)を除くのであり、『刺絡』手法のことである。

【注】訓み下し文

「脈之応于寸口・如何而脹・歧伯曰・其脈大堅以濇者・脹也…」

～脈ノ寸口ニ応ズルヤ何レノ如クニシテ脹トスヤ、歧伯曰ク其ノ脈ノ大堅ニ以テ濇ノモノハ脹ナリ

「…黄帝問于歧伯曰・脹論言・無問虚実・工在疾瀉…今有其三而不下者・其過焉在・歧伯対曰・此言陷于肉盲・而中気穴者也・不中気穴・則気内閉・鍼不陷盲・則気不行・上越中肉・則衛気相乱・陰陽相逐・其于脹也・当瀉不瀉・気故不下・三而不下・必更其道・気下乃止・不下復始・可以万全…」

～黄帝歧伯ニ問ウテ曰ク 脹論ニ言ウ 虚実ヲ問ウコト無カレ 工ハ疾瀉ニ在リト…今其レヲ三タビシテ下ラザル者有リ 其ノ過ナルハ焉クニカ在ルヤ 歧伯曰ク 此レ肉盲ヲ陷シテ気穴ニ中ツル者ナリ 気穴ニ中ラザルトキハ気内閉シ 鍼盲ヲ陷サザレバ気行グラズ 上越ヲ肉ニ中ツレバ 則ワチ衛気ハ相乱シ 陰陽ハ相逐シテ 其レ脹スナリ 瀉スベクシテ瀉サザレバ 気故ヨリ下ラズ三タビシテ下ラザレバ 必ズ其ノ道ヲ更エヨ 気下レバ乃ワチ止メヨ下ラザレバ復タ始メヨ 以ッテ万全タルベシ…

「黄帝曰・膚脹鼓脹可刺邪・歧伯曰・先瀉其脹之血絡・後調其経・刺去其血絡也」

…黄帝曰ク、膚脹鼓脹ハ刺スベキカ、歧伯曰ク、先ニ其ノ脹ノ血絡ヲ瀉シテ、後ニ其ノ経ヲ調ノウルハ、刺シテ其ノ血絡ヲ去ルモノナリ…

【語注】

●肉盲・盲

楊上善は「肉盲トハ皮下肉上ノ膜ナリ、量ハ皮膚ト同類ナリ」と注する。

●上越中肉

郭霽春は「校注語訳」に「“上越”謂針入皮、而未陷盲。”中肉”指不中氣穴、誤中于分肉之間。」と注する。

●不下

郭霽春は「校注語訳」に「脹環不消…」と現代中国語に訳している。

●其過焉在

郭霽春は「校注語訳」に「…但現在已瀉過三次、脹環不消、它的錯誤在里？…」と訳している、「…その誤りは何れにあったのか？…」と言う訳である。

●鍼不陷盲則氣不行

楊上善は「不陷盲膜、則氣不行分肉之間也」

…盲膜陷ラザレバ氣分肉ノ間ニ行ラザルモノナリ……と言う。

●無問虛実

楊上善は「前言瀉虛補実、神去其室。今言無問虚実工在疾瀉、其故何也、所謂初病未是大虚、複取三里、故工在疾瀉。若虚已成、又取余穴、虚者不可也。」

～前ニ虚ヲ瀉シ実ヲ補シテ神其ノ室ヲ去ルト言ウ、今虚実ヲ問ウコト無カレ工ハ疾瀉ニ在リト言ウ、其ノ故ハ何ゾヤ 所謂初病ハ未ダ是レ大虚ナラズ 複ニ三里ヲ取ル 故ニ工ハ疾瀉ニ在リト、虚ノ已ニ成レルモノニ又余ノ穴ヲ取ルガ若シ、虚ナレバ不可ナリ…と述べている。

●膚脹鼓脹

これらの他に、腸覃・石瘕・石水について記述している、腸覃は腸のポリープ
 ような形状について述べ、石瘕 は子宮筋腫の症候の如きものについて述べてい
 る。石水は此処では記述していない。

●『靈枢』九鍼十二原第1に「…脹取三陽・殫泄取三陰…」と在る。この「…脹取三陽…」は『靈枢』脹論第35の「…其脈大堅以瀉者・脹也…」なる記述と見合っている。

以上のように手技を4種類に基本分類している、「補」「瀉」「泄」「除」になっているのである。

◎『難経』の「補瀉」決定

「病」の虚実に基づくべきであることを「八十一難」で述べている。そして「病」の「虚実」判断については、「四十八難」に「病ノ虚実トハ出ル者ハ虚トナシ、入ル者ハ実トナス、言ウモノハ虚トナシ、言ワザルモノハ実ト為ス」と述べている。此れと同じ事を、『素問』刺志論第53には「実トハ氣入ルナリ、虚トハ氣出ルナリ」と述べている。つまり、「外感病」は「氣入ル」ものであるから『実』であり、「内傷病」は「氣出ル」ものである、つまり「作用＝動き＝変化」が「内＝内部＝それ自身」から表出している～従って『虚』の性質の病である。「言ウモノ」とは、慢性病が未だ言

語に影響する程にはなっていないものであるから、と言う解釈には異論が見られないのである。症状はボヤけたもので、症状の進展も緩慢であるものが『虚』である、『不及』である。これに反して、症状が明瞭で病状の進展・変化が速く、患者の苦痛も激しいものが『実』である、『大過』である。従って、そのような状況は言語にまで影響するので「言ワザルモノハ実」と表現している、という解釈が確立されている。

◎内傷病の治療原理

「精神的なストレスは身体に芯からこたえる」とは、日常的に多数の人々の語るところである。つまり、正気が虚するのである。「正気の虚」の状態は、外邪に対する抵抗性が低下した状態・病に冒されやすい状態に他ならない。このことは、精神・神経科的な疾患において、発作が起きる場合には多少とも外邪が関与している事が、臨床の場ではしばしば見受けられる点からも判かるのである。明清の医学に至ると、「内傷が病として発現する時には、痰・飲・瘀などが何かの契機で蠢動している」と言う認識が形成された。

「痰」「飲」「瘀」などと、精神病や神経性疾患との深い関係が認識されたのである。

「正気」の『虚』は、不可避的に病理的産生物としての「飲・痰・瘀」を生じるが、これが、或る契機・或る条件のもとでは、病因物質として「経脈」「臓腑」の機能を阻害して発症させる。つまり、「飲・痰・瘀」などが蠢動する契機となる『外邪』と、「飲・痰・瘀など」の所在する所とは、「邪の『実』」の状態となっていることに他ならない。

故に「内傷」病の治療には、『虚』している『臓』の『補』と、「邪実」の側面の『瀉』とが、并行的に施術されることが重要となるのである。

◎「邪気実」「正気虚」の臨床概念の問題点を思い付くままに触れた。『「病証の虚実」(大過と不及)に従って「補瀉」を決定する』という大原則の重要性は、いくら強調してもし過ぎると言うことは無い。実際の手技運用には「補中に瀉を含む」「瀉中に補を含む」などと表現されるものが在る。これは病態の複雑さに由来しているものである

病態は虚実で表現するよりも「大過不及」で表現する方が良い。病態を表現する用語としては、「虚実」を用いない方が良い。もともと病態論では「正気の虚に邪が乗じて病む」のであり、「実」と言う場合は「邪気が体を侵襲している状態」を指しているからである。『素問』・『靈枢』や『難経』では「病の虚実」と言う場合も「病の大過不及」と言う場合もあるが、「大過」「不及」と表現する場合の方が多く見受けられるようである。病態を表現する用語としては「虚実」は不適當のように思われる。表現している次元が異なっているから、補瀉の選択の基準概念としては適當とは思えない。「大過」「不及」の用語の方が明解であるように思われる。治療は病邪を除くことに他ならない、「大過」の場合の「病邪の除き方」と「不及」の場合のそれとは「やり方」「抜き方」「除き方」が異なっている。この点を強調して行く必要がある。

◎補瀉決定基準と虚実判断の問題

『難経』「四十八難」の虚実の問題と「八十一難」の「補瀉決定の原理」の記述は、『鍼灸問対』（明・汪機）の次のような記述によって、臨床的に明解に敷衍されたと言えよう。

〔1〕「経曰・形氣不足・病氣有余・是邪勝也・急瀉之。形氣有余・病氣不足・急補之。形氣不足・病氣不足・此陰陽俱不足也・不可刺之；刺之則重不足・老者絶滅・壯者不復矣。形氣有余・病氣有余・是陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚実。故曰・有余者瀉之・不足者補之・此之謂也。」とあるが、『靈枢』根結第5の中の形氣と病氣の有余・不足を述べている文と極めて近似のものであり、『靈枢』の文は「故曰刺不知逆順・真邪相搏。満而補之・則陰陽四溢・腸胃充郭・肝肺内臏・陰陽相錯・…」の文に続いているのである。

表にして見ると、

形氣不足・病氣有余	是邪勝	急瀉之
形氣有余・病氣不足	(欠)	急補之
形氣不足・病氣不足		陰陽氣俱不足・不可刺之 刺之則重不足・老者絶滅・壯者不復
形氣有余・病氣有余	陰陽俱有余	急瀉其邪・調其虚実

〔2〕上の本文に自ら注釈し解説している。注解文は次の通り

「夫形氣者・氣謂口鼻中喘息也。形謂皮肉筋骨血脈也。形勝者・為有余；消瘦者・為不足。其氣者・審口鼻中氣。勞役如故・為氣有余也；若喘息氣促・氣短・或不足以息者・為不足。故曰・形氣也・乃人之身形中氣血也。当補当瀉・不在此・只在病来潮作之時・病氣精神增添者・是病氣有余・乃邪氣勝也・急当瀉之。病来潮作之時・精神困窮・語言無力及懶語者・為病氣不足・乃真氣不足也・急当補之。若病人形氣不足・病来潮作之時・病氣亦不足・此陰陽俱不足也・禁用鍼・宜補之甘藥。不已・臍下氣海穴取之。」

「形氣」といっている場合の、

イ)「氣」とは、呼吸の事・呼吸能力の事であり、現代西洋医学的な用語でもっと性格に言えば、心肺機能のことであると言うことが出来よう。

ロ)「形」とは、しっかりした皮膚・堅太りの肉付き・よく発達した腱・筋・骨・そして・充分に発達した血管・の事である。このように現代医学の用語に記述し直すことが出来るだろう。

そこで、「氣」を候がうという事は「呼吸機能の程度や様子を審らかにする事」であると記述している。

「形氣の有余・不足」を言うときは、

- a. 体格がしっかりしているものは「形の有余」、痩せて消耗しやすいものは「形の不足」であるとしている。
- b. 「気の有余」とは、労働や運動などで呼吸の様子に乱れが見られないものを指している。「気の不足」とは、労働や運動などに呼吸が乱れアエギ、また呼吸が浅く短くなるという場合や、息がしにくい場合を言っている。
- c. このように「形気」と言うものは、人の身に機能している「気血」の様子そのものの事である。しかし、「補」と「瀉」とを決定しようとする時に大切な事は、この「形気」の「有余」や「不足」の問題では無い点である。

◆このように述べた上、更に続いて「補」すべきか「瀉」すべきかを決定する問題を記述している。それを整理すると次のようになる。

- a. 病になって、病状が明らかに悪化し、精神・神経的にテンションが増大しているものは、有余の病気で、邪が勝っているのである。従って急いで邪（有余の病でもある）を瀉さなければならない。
- b. 病んでいる状態の、メンタルな面に沈滞が見られ、言語に力乏しく・或はけだるそうな喋り方をしているというのは、不足病であり、真気が不足なものである。これは急いで補すべきである。
- c. 若し病人の「形気」が不足しており（呼吸には力が乏しい、アエイであり、痩せていて如何にも体力が無く色艶も悪くものうげである）、病のほうもまた不足病であるものは、陰陽がともに不足しているものであるから、鍼を用いるのでは無く甘葉によって、病人を補さなければならない。
- d. 甘葉を用いて補しても病が治癒に向かわないようである場合には、臍下の気海穴を用いて対処するのである。

〔3〕汪機の説明では「形気も病気も不足」の内容が、今一步判かりにくい。病人が如何にも弱々しい人・体力が非常に衰えている老人の場合、「何だか分からないし、これと言って思い当たることも無いのに、体調が普段の様ではない、どうも調子が悪い」と言うものを見受けることがある。この場合は「形気」「病気」とともに「不足」に該当する。つまり「鍼灸」よりも「甘葉」で治療したほうが良いと記述されている状態であろう。

昭和の日本古典鍼灸は、法制的に、薬を使用したり指示したり出来ないと言う、制度的な制約の中で活動しなければならなかった事が、返って幸いして、『形気・病気ともに不足』の場合にも対応する治療法を、作り出したと言えるだろう。「重要治療穴の浅刺留鍼法」「接触鍼法」と所謂「保健鍼」であり「体質補強治療」である。「素因証」

なる概念を主張するものがある、これは、「素因」に適応する「穴」が「診定できる」ものであるから、その、「素因適応穴」に施治することが、「健康増進」や「保健」に有用であるので「素因証」としたのだと主張している。

〔4〕「補法」が該当するのは、「形氣」は「不足」にはなっていない状態で、「病氣不足」の場合である。これは「何時履患したかハッキリしない、あるいは時間をかけてユックリ患った」状態で、「病候も明瞭では無く」、また、「苦痛も緩和である」という病状である。

臨床的には、「疲労」・「カゼを引くかも知れない」・「食事アレルギーの可能性」と「不足病の前兆症状」（前項の「素因証」との区分は明らかでは無い）が、多いように思われる。

〔5〕「瀉法」の問題で間違いやすいのは、「形氣不足」し「病氣有余」の場合は「瀉法」が適応するのに、誤って異なった理解になり易いことである。「形氣」が充実していればこそ、人身は病邪と戦って邪を追うことも出来よう。従って、「不足の病」は「補」すことによって治癒に向かわせることになるだろう。「病」は「形氣」に問題は無くとも「邪」が勝っているから「病」むのである、故に、「有余の病」（の邪は）は「瀉」すべきだし、「不足の病」の場合は、「形氣」を「補」（つまり真気を増益させる）して、人身の「真氣」を力付けてやって、その「真氣」の力をもって、自ら「邪を追」わしめるのである。しかし、「形氣」が「不足」している場合には、「補」法を施しても「不足の病の邪」を追う程には「真氣」の力は増加できないから、「鍼灸」よりも「甘薬」が適切である、こういう認識が「形氣不足し病氣不足」の場合には「鍼灸は用いない」と言うことである。

◎鍼灸の治療とは（難経の鍼灸治療論）

「…是謂春夏必致一陰・秋冬必致一陽。」(70)

～是レ謂ウ・春夏ニハ必ズ一陰ヲ致シ・秋冬ニハ必ズ一陽ヲ致ス・ト……、

「…知榮衛之流行・経脈之往来也・随其逆順而取之・故曰迎随…知其内外表裏・随其陰陽而調之・故曰調氣之方・必在陰陽。」(72)

～榮衛ノ流行・経脈ノ往来ヲ知ルナリ・其ノ逆順ニ随イテ之レヲ取ル・故ニ迎随ト曰ウ…其ノ内外表裏ヲ知リテ・其ノ陰陽ニ随イテ之レヲ調ノウ・故ニ調氣ノ方ハ必ズ陰陽ニ在リト曰ウ…、

「…其陽氣不足・陰氣有余・当先補其陽・而後瀉其陰・陰氣不足・陽氣有余・当先補其陰・而後瀉其陽・榮衛通行・此其要也。」(76)

～其ノ陽氣足ラズシテ陰氣有余ナレバ・サキニ其ノ陽ヲ補シテ後ニ其ノ陰ヲ瀉スベシ・陰氣不足シテ陽氣ノ有余ナレバ・先ニ其ノ陰ヲ補シテ後其ノ陽ヲ瀉スベシ・榮衛ノ通行ハ此レ其ノ要ナリ…、

「…迎而奪之者・瀉其子也・隨而濟之者・補其母也…」(79)

～迎エテ之レヲ奪ウトハ其ノ子ヲ瀉スモノナリ・隨イテ之レヲ濟スクトハ其ノ母ヲ補ナウモノナリ……、

「…少壯者・血氣盛・肌肉滑・氣道通・榮衛之行不失于常・故昼日精・夜不寤也。老人血氣衰・榮衛之道澹・故昼日不能精・夜不能寐也…」(46)

～少壯ノ者ハ血氣盛ンニ肌肉ハ滑ニシテ氣道ハ通ジ・榮衛ノ行リハ常ニ失セズ・故ニ昼日ニハ精ニシテ夜ニハ寤マザルナリ・老人ハ血氣衰エテ・榮衛ノ道ハ澹ル・故ニ昼日ニハ精ナルコト能ワズ・夜ニハ寐ル能ワザルモノナリ……。

このような『難経』の記述から、「陰陽の調和」「榮衛の通行」「氣道通」等が、治療の枢要な点（キーワード）である事が判かる。血氣が充実していても「肌肉」が「滑」らかでなければならぬ、その為にも「榮衛の通行」が順当である必要がある。そして、この「榮衛の通行」の順当さの為には、「氣道」（つまり榮衛の通路）が通じている事、刺法論や腧穴論や経脈論や病因論そして三焦論の記述との関連から「氣道通」「肌肉滑」の条件と方法が明らかになる。

未完 1992・7・25 補